

Bird Research Annual Report 2019

バードリサーチ活動報告



NPO法人 バードリサーチ
Japan Bird Research Association

ごあいさつ

バードリサーチでは鳥の生態や生息状況に興味を持つ方々と共に全国各地で調査を展開しています。そして、それらの調査から得られた結果を社会に発信し、野生生物と人間が共存・共生する社会を目指しています。

2016年から全国で実施している鳥類繁殖分布調査によって、アマサギのような小型のサギ類などコロニー性の水鳥が減少していることがわかってきました。また、ホオジロやセッカなどの草原性の鳥も分布が縮小しています。草原に住む鳥類の減少は国内だけでなく、北米でも50年間で半数近く減少したとする研究成果が発表されています。これらは継続的に鳥類をモニタリングする事で明らかとなりました。

環境変化や種の絶滅への兆候をいち早く察知し、それを広く伝えることで社会の関心を自然環境に向けていくことや、環境保全を推進するためのデータや分析結果を発信していくことが私たちの活動の大きな目的です。

2019年に実施した調査には、延べ3,282人の方々にご参加頂きました。誠にありがとうございました。2020年もぜひ、バードリサーチの調査にご協力ください。

アマサギ (Photo: 高橋ゆう)

STAFF



左から
佐藤望、高木憲太郎、黒沢令子、加藤ななえ、神山和夫、植田睦之、三上かつら、
平野敏明、山崎優佑、守屋年史



ホオジロ (Photo: 大塚之稔)

全国繁殖分布調査

しばしば起きる大規模な災害、中山間地の過疎化や農林業の変化、そして気候変動。日本の自然は大きく変化しています。スズメの減少が話題になったように、自然の変化に伴い思いもかけない鳥が減ったり増えたりしています。

そんな鳥たちの現状を明らかにし、対策を考えるために、2016年から2020年までの5年計画で鳥の国勢調査ともいえる「全国鳥類繁殖分布調査」を行なっています。

88%の調査地で調査が完了

この調査は、1970年代と1990年代に環境庁の調査として実施された全国約2,300のコースを調査し、アンケート情報を収集することで、2020年までに日本で繁殖するすべての種の分布図を描くことを目指しています。その結果は、すでにレッドリストの改訂など様々な活動に役立てられています。これまでに1,826人の参加を得て、2,062地点の調査を終えることができました。

小型の魚食性の鳥が急減

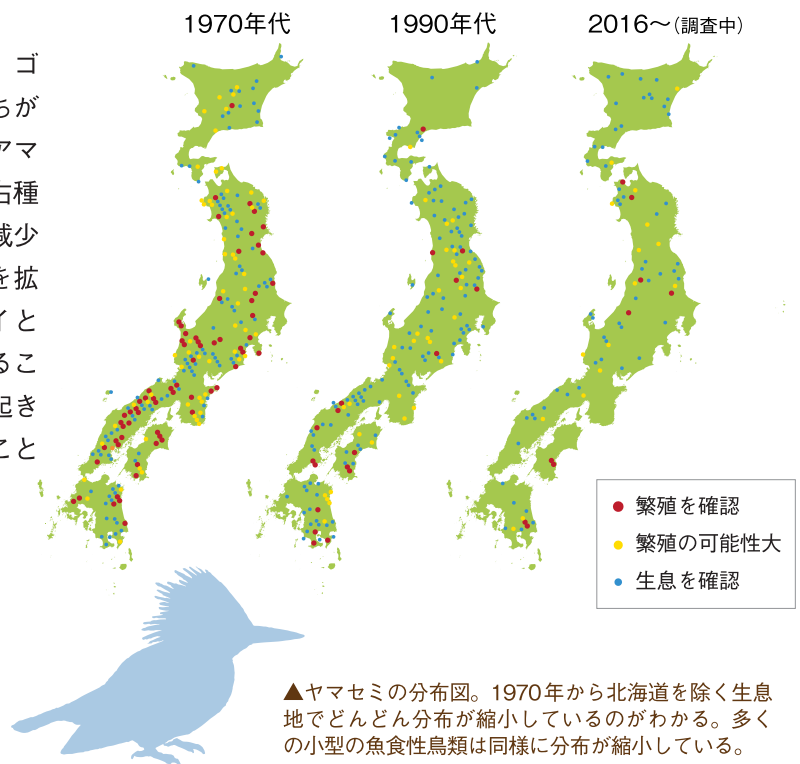
これまでに集まったデータから、コアジサシ、ゴイサギ、ヤマセミといった小型の魚食性の鳥たちが急減していることがわかってきました。また、アマサギのような農地を使う鳥も減少しており、優占種であるスズメやホオジロも記録個体数が大きく減少していました。逆に、森林の鳥の多くは、分布を拡げているのですが、ビンズイやメボソムシクイといった標高の高いところにいる鳥は減少していることがわかってきています。なぜこうした変化が起きているのかを、日本の自然環境の変化と比べることで明らかにしていきたいと思います。



Photo: 紅林 重光
コアジサシ



Photo: 中山厚志
ビンズイ



調査完了のためにご協力ください

たくさんの方の参加と協力で、調査は進んでいますが、まだ調査しなければならないコースが残っています。また、指定コースの調査だけでなく、アンケート情報を収集することで、分布図の精度を上げていきたいと考えています。この調査の趣旨に賛同いただける皆様、ぜひ調査にご協力ください。



全国鳥類繁殖分布調査

主催団体：バードリサーチ、日本野鳥の会、日本自然保護協会、
日本鳥類標識協会、山階鳥類研究所、環境省生物多様性センター

<http://www.bird-atlas.jp>

調査事務局：バードリサーチ

全国繁殖分布調査ニュースレター

<http://www.bird-atlas.jp/pub.html>

活動報告 その1



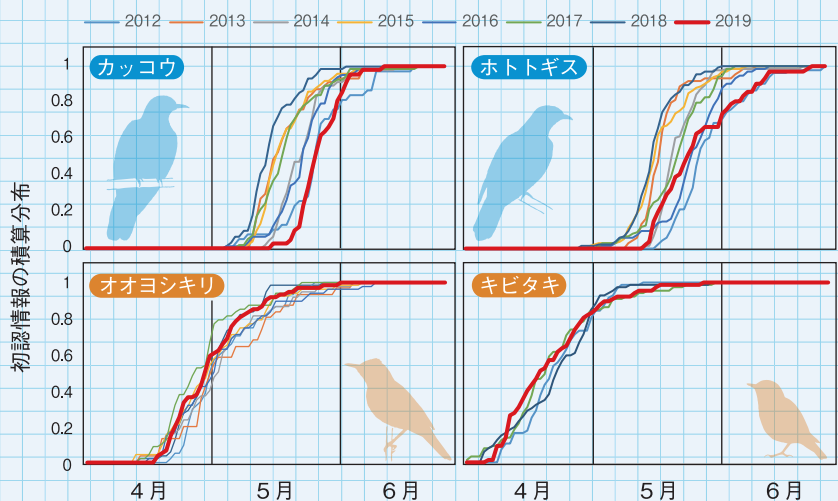
今

年はカッコウ類の渡来が遅かった

夏鳥の多くは、ほぼ決まった時期に日本に渡ってきます。ところが、カッコウ類はすこし違います。バードリサーチの季節前線ウォッチでは、カッコウとホトトギスの初認情報を集めていますが、年により渡来時期が2週間も変わることがあるのです。そして今年の渡来時期は調査開始以来、もっとも遅い年の1つでした。

今年が特に寒かったということではなく、なぜ遅かったのかはわかりません。また、なぜカッコウ類の渡来時期だけが年により大きく変わるのかもわかっていません。托卵するという習性が何か影響しているのでしょうか？ それとも毛虫を食べる特異な採食習性が影響しているのでしょうか？ 今後も情報を蓄積しつつ、その理由を明らかにして、気候変動や環境変化が彼らに与える影響について考えていきたいと思えます。

▶カッコウ、ホトトギス、オオヨシキリ、キビタキの渡来状況。各年(今年は赤線)の渡来状況を渡来開始から終了までの渡来割合の経時変化で示した。カッコウホトトギスは同じ夏鳥のオオヨシキリやキビタキと比べて、年によりその時期が大きく異なっているのがわかる。



民間企業とハクチョウ調査を実施しました

鳥類のモニタリングによる環境調査は、主に個人のボランティア調査員さん達によって行われています。調査員のさらなる増加を目指して、バードリサーチは日本ではまだまだあまり行われていない、企業の社会貢献活動による、鳥類のモニタリングの新しい形を試みました。今回、ボランティア調査を実施してもらったのは、棚卸ビジネスを展開している株式会社エイジスです。エイジスはコンビニやスーパーなどの在庫の数を数える業務を行っている、カウントのプロ集団です。エイジスのスキルが活かせる調査として、2019年1月31日に、宮城県の鳴瀬川でハクチョウ類のカウント調査を行いました。ハクチョウ類は鳴瀬川をねぐらとして利用しているので、早朝の飛び立ち前にカウントしました。その結果、コハクチョウ 2,768羽、オオハクチョウ 124羽をカウントしました。今後も企業の調査への参画を目指した活動を実施していきたいと考えています。



▲調査風景。エイジスの棚卸で用いる機材を使って調査を実施しました。

オ

オオハクチョウの採食行動と分布に変化が起きています

オオハクチョウは秋と春の渡り時期に北海道を中継地として利用し、一部は越冬もしています。以前は北海道東部を利用するオオハクチョウが多かったのですが、モニタリングサイト1000の分析結果から利用状況が変わってきていることが分かりました。これまで個体数が多かった地域で数が減り、それと入れ替わるように北部で増えてきているのです。原因としては、気候の温暖化で北部の湖沼が凍る期間が短くなったことや、東部に多かったハクチョウ給餌場でのエサやりが減ったこと、オオハクチョウが飼料用トウモロコシ畑で収穫後にこぼれているコーンを食べる習性を身につけて採食できる場所が増えたこと、などが挙げられ、これらが総合的に影響しているのではないかと考えられます。



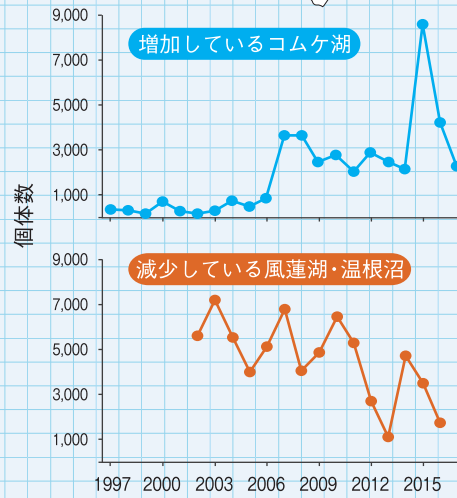
Photo: 城石一徹

オオハクチョウは沿岸や汽水湖でアマモを主食にしていたことが、最近10年ほどのあいだに飼料用トウモロコシ畑で姿を見ることが多

くなりました。栄養価の高いコーンを食べるようになったことで生存率や産卵数が高まり、個体数の増加につながる可能性があります。

◀飼料用トウモロコシ畑のオオハクチョウ

● 増加しているサイト
● 減少しているサイト



▲北海道における、オオハクチョウの増減。

シ

シギ・チドリ類から見た日本の水辺は？

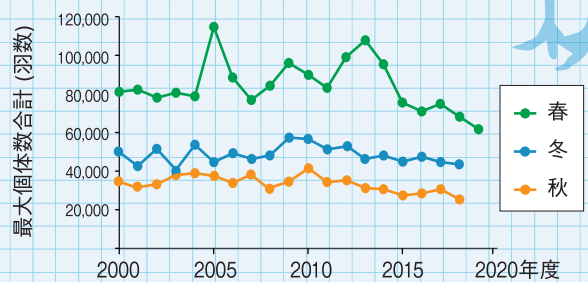
2004年から実施されている環境省のモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査では、全国約140サイトで調査が実施されています。2017年までに合計836名15団体の協力により調査がなされ、多くの調査協力者によって支えられています。しかし、肝心の干潟や内陸の湿地を利用するシギ・チドリ類は減少傾向にあります。特に日本の冬の干潟に最も数の多いハマシギ、砂浜に生息しているシロチドリ、水田やハス田を利用するタカブシギやタシギなどは、ここ20年の間に大きく減少しています。

要因は十分にはわかってはいませんが、日本では大規模な埋め立てなどの工事は減少していますが、特に東

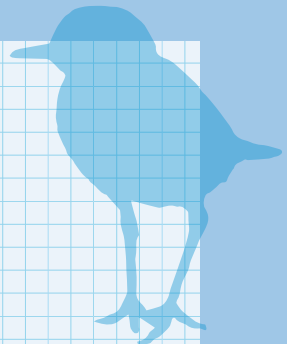
京湾、伊勢・三河湾、大阪湾などの都市部に近い沿岸部では、すでに干潟が開発され生息環境が少なく、それに伴ってシギ・チドリ類の個体数は少なくなっています。さらに現在は、放棄田の増加や水田やハス田の減少、水田の利用方法、干潟の質（水質や餌量）の変化が考えられます。また国外に目を向けると気候変動や密猟などの影響も考えられています。日本のシギ・チドリ類の多くは渡り鳥であり、一年で多くの東アジアの国を訪れます。国内のシギ・チドリ類の保全のためには全体的な個体数の減少に歯止めをかける必要があり、国際的な協力が今後重要になっていくと思われます。



鳥アジシギ (Photo: 藤井 薫)



▲モニタリングサイト1000におけるシギ・チドリ類の最大個体数合計の推移



活動報告 その2

ホ

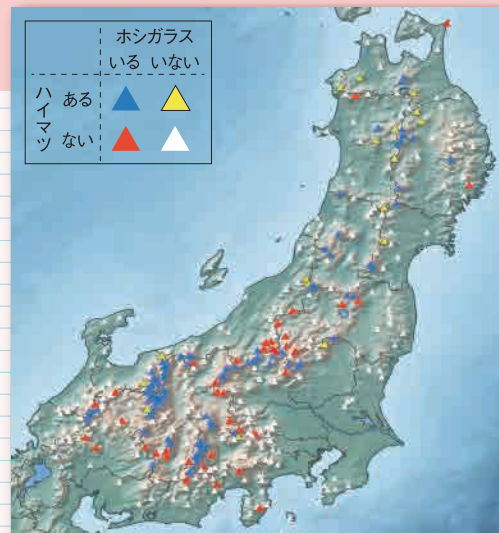
シガラスを探せ!!

2017年からホシガラスの分布状況の調査を実施しています。この調査では、アウトドアメーカーであるモンベルの協力を得て一般の登山者の方たちにも呼びかけて目撃情報を集めています。

2シーズンにわたり皆さまにご協力いただき、2,684件ものホシガラスの目撃情報を集めることができました。情報をお寄せいただいた大勢の方と、登山記録サイトのホシガラスの目撃情報を収集いただいたボランティアの方々に感謝します。

特にたくさんの情報が得られた東北から中部山岳にかけて、ホシガラスの目撃された山をリストアップしました。ハイマツの球果はホシガラスの繁殖期の主要な食物と考えられています。そこで、ハイマツの有無についても植生図情報をもとに調査し、比較してみました。

ハイマツのある山でホシガラスの目撃情報は多く得られていますが、ハイマツはないけどホシガラスがいる山もあれば、逆にハイマツがあるけどホシガラスの目撃されていない山もありました。前者(▲)は中部山岳の比較的標高の低い山や越後山脈に、後者(△)は東北に多い傾向がありました。BRNews 2019(6)



▲東北から中部山岳にかけての主な山における、ホシガラスの目撃情報とハイマツの有無

シ

ロチドリ類調査 九十九里浜で観察会

砂浜の野鳥の普及啓発の一環で東金こども科学館と協力し、九十九里浜周辺の地元の子供たち向けに講話と観察イベントを行いました。コアジサシコロニーとその近くに集まって巣をつくるシロチドリの生態や冬はどこに行っているのか、ネコヤカラスなどの天敵の存在など、砂浜で生活する彼らの生態や保全を中心に話題を提供し、多くの質問を受けました。当日の現地での観察はあいにくの雨模様でしたが、シロチドリやコアジサシのコロニーなどを観察してもらうことができました。彼らの生息地である砂浜は各地で浸食が報告され生息環境が脅かされています。また砂浜の鳥たちは、漁業やレジャーなど人



▲観察会のようす。

とのかわりも大きく、保全のためにはこの環境に関係する様々な人々にまずは鳥のことを知ってもらうことが必要だと考えています。このような活動を通じてより身近な自然に気づいてもらうとともに、分布などの情報も収集し保全に活かしていきたいと考えています。



シロチドリ (Photo: 鳥居 淳)

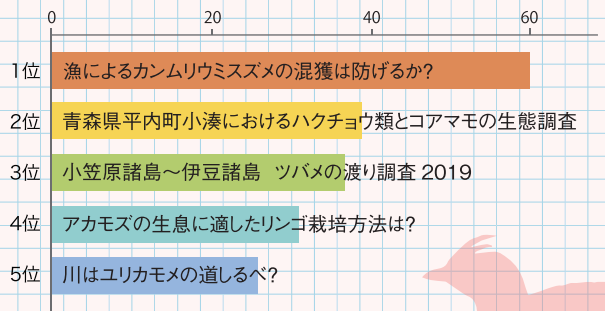


コアジサシ (Photo: 松丸 一郎)

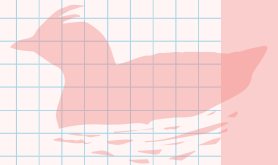
バ

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト

みなさまから寄付を募って、それをもとに鳥類の調査や研究を行なう方に支援を行ないました。支援額の総額は114万円、これらを得票数で割り振り10件の支援先に贈呈しました。得票数の最も多かった調査研究プランは枇榔島調査研究会の中村豊さんによる「漁によるカンムリウミスズメの混獲は防げるか?」でした。カンムリウミスズメは日本近海にのみ分布する海鳥です。個体数の減少が危惧されていますが、その要因のひとつに、延縄漁や刺し網漁での混獲があります。中村さんは、カンムリウミスズメの最大の繁殖地といわれる宮崎県の枇榔島で捕獲し、GPS ロガーによる追跡をしようと計画し、調査研究プランを応募されました。彼らの採餌トリップの詳細な軌跡がデータとして得られ、混獲の回避などのために多くの知見をもたらしてくれることを願っています。また、2017年度の支援先の成果報告書がまとまり、支援者の方々へ調査結果の報告とWebへの掲載をしました。



▲2018年度の支援の得票結果



BRNews 2018(12), 2019(3)

モ

モニタリングサイト1000の講習会を開催しました



全国鳥類繁殖調査やモニタリングサイト1000といった市民参加型の全国規模の鳥類調査は複数ありますが、今後も持続していくためには新規調査員さんの参加が必要です。しかし、調査員の募集や育成などがなかなかうまくいっていないという現状があります。そこで、環境省の委託を受けて、各調査の調査員さんが他の調査にも参加してもらえるよう、複数の調査の成果報告を含む講習会を宮城県、千葉県、大阪府で開催しました。また各講習会でアンケート調査を実施して、調査員の獲得のための情報収集も行いました。今後、調査員さんの引退などが相次ぐと予想されますので、バードリサーチでも調査員さんのリクルートに力を入れていきます。

◀講習会の風景。各講習会では、ガンカモ類（大阪府）、シギチドリ類（千葉県）、陸生鳥類（宮城県）の調査の講習を実施しました。

A

ASEAN 渡り鳥の会議に参加してきました

ASEANは東アジア・オーストラリア地域の渡り鳥にとって、重要な中継地や越冬地となっています。多くの渡り鳥が利用している場所では、ラムサール条約の登録湿地になっていたり、フライウェイサイトなどに登録されていたり、保護区として設定されていますが、これらの場所でモニタリング調査を実施している場所は限られています。また、どのくらい渡り鳥が利用しているのか、調査されていない場所もたくさん残っています。そのような背景の中、日本政府の援助を元に、ASEAN内の渡り鳥にとって重要なサイトの調査をしっかりと行うために各国の代表者が集まって、会議が開催されました。バードリサーチ佐藤が本会議に参加し、日本のモニタリングの現状や、学生による長期モニタリングについての情報を提供してきました。今後もASEAN地域でのモニタリング調査の維持に貢献できればと考えています。



インターネット・バードソン

スマートフォンやパソコンから野鳥記録を登録できる「フィールドノート」を利用して、期間中に何種の野鳥を観察できるかを競う第1回インターネット・バードソンを6月上旬に開催しました。イベント期間が長いので、普段のバードウォッチングの延長で気軽に参加していただけたかと思います。今回は、153名の皆さんが参加がされて、1,054地点から249種もの観察記録が登録されました。さらに、各参加者の観察種数がWeb上にリアルタイムに表示されるので、日々激しい攻防が続いて、何度も順位が入れ替わる熱戦になりました。



▲第1回インターネット・バードソンで報告のあったメッシュ。観察回数が多いほど色が濃い。

インターネット・バードソンの野鳥記録は広範囲から集まるので、野鳥の分布を調べるための貴重なデータにもなります。2020年1月1日～19日に開催する第2回バードソンの記録は、全国鳥類越冬分布調査のデータとしても活用させていただきます。2016年の国際自然保護連合のレッドリストで、これまでどこにでもいると思っていたカシラダカが絶

滅危惧Ⅱ類に指定されたように、減少している冬鳥もいます。また、アカハラなど地上で行動する小鳥類や水鳥などは温暖化や積雪の減少で分布が北上しています。全国鳥類越冬分布調査では、こうした鳥たちの変化を明らかにしていきます。

バードウォッチングを楽しみ、そして観察種数を競いながら、調査/保護への貢献もできるインターネット・バードソン。定期的なイベントとしてこれからも実施していきますので、ぜひご参加ください。

◀世界的に減少が進んでいる冬鳥のカシラダカ。ヨーロッパではなくなってしまった場所も。



カシラダカ (Photo: 染谷カーシャ)

表紙写真：コミミズク (Photo: 小野安行)

特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒183-0034 府中市住吉町1-29-9
Tel / Fax : 042-401-8661
E-mail : br@bird-research.jp
<http://www.bird-research.jp>

デザイン：いぎものパレット

